

留学・研究計画書

氏 名 井内真帆	留学機関名 西藏自治区社会科学院
留学先国名 中華人民共和国	留学期間 西暦 2005 年 6 月 ~ 2007 年 5 月
研究テーマ (留学目的) 9~12 世紀のチベット仏教史 —西藏自治区・ラサの写本と寺院調査—	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>9~12 世紀におけるチベットの仏教史は未だ明らかになっていない部分が多く、研究が進んでいない。その理由は、この時代の史料が少ないこともあるが、特に日本のチベット史研究においては敦煌文献を用いた古代吐蕃王国史 (7~9 世紀) 研究、または漢文史料等を用いたモンゴルや清朝等の周辺諸国とチベットとの関係史 (13~20 世紀) が主であり、関心のそのほとんどが政治史にあったことにある。しかしながら、現在中国の一部であり一国家として存在していないチベットについて考えると、その政治よりも、現在のインドの一部、モンゴル、ネパール、ブータン等広範囲に影響を与え、「チベット文化圏」と称する一大文化圏を形成するに至ったチベット仏教文化の影響力は非常に大きいものであり、文化とその歴史こそがより詳細に研究されるべきではないかと考える。</p> <p>申請者は、実際に 2003 年 9 月から 2004 年 3 月までの約 7 ヶ月間西藏大学に籍を置き、現地の史料の有無や現地の研究者との交流により西藏自治区の現状を知ることができた。西藏自治区には 9~12 世紀に関する史料、例えば未公刊の写本等が多く現存する。これらの写本は現地の研究者との共同研究でのみ現在研究が可能である。そしてこれらの文献に加えて、寺院調査や口頭伝承の収集等のフィールドワークによる研究も必要である。これまで様々な理由により西藏自治区内のフィールドワークは困難であったが、現地の状況の変化により直接調査をすることは不可能ではなくなり、文献とフィールドワーク両方を合わせたチベット研究が可能となりつつある。文献とフィールドワークによる本研究の方法として、文献については上記の未公刊の写本を西藏自治区にある西藏自治区社会科学院の研究者と共同研究により行う予定である。一方、フィールドワークについては、ペンボ地方 (Phan po, ラサの北) を中心にカダム派 (bKa' gdams pa) の寺院調査を予定している。カダム派は 11 世紀にドムトンパ ('Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas, 1005-1066) により創始された宗派である。このカダム派は、後に「新カダム派」と称されるゲルク派 (dGe lugs pa) に吸収されることもあり、後にほとんどの寺院が異なる宗派に属することになる。しかし、カダム派以降に成立した諸宗派の祖師たちのほとんどがカダム派の教えを学んだこともあり、カダム派にこそ古代吐蕃王国崩壊後から現在まで続くチベット仏教及び仏教文化の根本が集約されていると考える。カダム派の寺院はほとんどが 11~14 世紀に建立されたものであり、建築物としても非常に貴重なものであるが、未だ本格的には調査が行われていない。また、大部分の寺院が政府の援助を受けておらず、経済的にも非常に規模の小さな寺院が多い。これを網羅的に調査し地図等を作成することも本研究の目的であり、これは寺院の保存事業にも繋がる作業であると考え。以上が西藏自治区に赴き行う研究テーマ及び目的である。</p>	

成果報告書

記入日 2007年 4月 15日

氏名 井内真帆	留学先国名 中華人民共和国	所属機関 西南民族大学
研究テーマ：9-12世紀のチベット仏教史 — 西蔵自治区・ラサの写本と寺院調査		
留学期間：2004年5月～2007年4月		
<p>2005年5月から2007年4月までの2年間、中国蔵学研究中心（北京）と西南民族大学（成都）において、「9-12世紀のチベット仏教史 — 西蔵自治区・ラサの写本と寺院調査」の研究テーマのもと、研究活動を行った。2年間の中国滞在は北京—ラサ、成都—ラサの移動、加えて帰国や国際学会など、移動の連続で大変ハードなものであった。さらに、期間中、所属機関を変更せざるをいけなくなったことや、冬の成都是思ったよりも寒さが厳しく、体調を壊すなど、多少のトラブルも発生した。しかし、全体を振り返ってみると、この2年間で自身の研究に関する多くの地を訪れることができ、また今年9月に提出予定の博士論文の資料を多くあつめることができ、改めて大変充実した2年間であったと感じている。ここでは、この2年間の留学生活の報告と成果、さらに今後の研究の展望をまとめ、最終報告としたい。</p> <p>1.2 年間の研究生活の概要</p> <p>1-1. 中国蔵学研究中心における研究活動（2005.5-2005.9）</p> <p>4月末に北京に入り、受け入れ先である中国蔵学研究中心の研究者と研究計画などについて話し合い、5月中旬にはチベット自治区ラサに入った。最初のラサでの4ヶ月に及ぶ調査は、研究課題の通り、ラサ及びラサ近郊における写本と寺院の調査を行った。写本については、昨今、チベット人による写本及び古籍の目録編纂、研究が盛んに行われており、その中でもラサでは珍しい私設の研究所であるペルツェク・チベット文古籍研究室（dPal rtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang）の協力のもと、ラサにおける古籍の所蔵状況、またチベット人研究者による研究動向など、たくさんの情報を得ることができた。一方、寺院調査については、ラサ市内から車で2,3時間ほどのペンボ（'Phan po）、メルド・クンカル（Mal 'gro gung dkar）にある、10世紀から14世紀にかけて建立されたカダム派（bKa' gdams pa）寺院の調査を行った。交通の便と道路があまり良くないことから、車をチャーターしての調査であった。また、調査の合間に、ラサ滞在中個人授業をお願いし、西蔵大学の先生によるチベット語の詩についての授業や、西蔵自治区社会科学院の先生による西チベットの歴史についての授業を受けることができた。</p>		

1-2. 西南民族大学における研究活動 (2005.10-2007.3)

2005年9月に一度、北京に戻った際、所属先であった中国蔵学研究中心の研究所の手続き上のトラブルが発覚し、また当初は認めていたチベットでの調査にも難色を示すなど、研究課題に自由に取り組むことが困難な状態に陥ってしまい、10月上旬の2週間ほど帰国せざるを得なくなった。受け入れ研究者と話し合った結果、四川省成都にある西南民族大学に移動することになり、10月には成都入りをした。西南民族大学はチベット人教師、学生が多く、チベット学科もある。チベット学科の教師の中から、クンワン(Kundbang)先生に指導教員を引き受けて頂き、週に2度程度、カム(東チベット)のデンマ('Dan ma, 現在の四川省甘孜藏族自治州石渠)地方の歴史について、漢語とチベット語の先行研究を用いて、授業をして頂いた。自身の研究の他にも、成都滞在中に、中国語の習得に努め、また『中華大蔵経』の編纂で有名な大蔵経対勘局でチベット人のためのチベット語の文献講読の授業にも参加した。

2006年4月には再びラサに入り、7月初旬まで約3ヶ月滞在した。昨年に引き続き、写本調査に関しては、ペルツェク・チベット文古籍研究室の協力で写本の調査を行った。ラサにおける写本調査の成果の一環として、ペルツェク・チベット文古籍研究室編纂の目録、『デプン寺所蔵古籍目録』について「ペルツェク・チベット文古籍研究室編纂『デプン寺所蔵古籍目録』: (新刊紹介)」(『佛教学セミナー』83号,2006)という書評を公表した。寺院調査に関しては、昨年に引き続き、ペンボとメルドコンカル、そしてツァン(gTsang)地方にあるナルタン(sNar thang)寺やネニン(gNas rnying)寺など、カダム派寺院の調査を行った。

そして、7月中旬に一時帰国の後、8月27日から9月2日までドイツ・ボン大学で開催された11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (第11回国際チベット学会)において、*bKa' gdams pa Manuscripts Discovered at Khara-Khoto in the Stein Collection*の題目で発表を行った。学会終了後、再び成都に戻り、9月末から10日間ほどデンマ地方の調査のため、カム地方を訪れた。成都を出発して、バスで3日かかり、目的のデンマに到着した。デンマでは11世紀に建立されたデンタン寺(Dran thang dgon)、タシ・ナムゲーリン(bKra shis rnam rgyal gling)を中心に調査を行った。タシ・ナムゲーリンでは活仏であるカルマ・ワンチュク(Karma dbang phyug)氏に話を聞くことができ、寺院録が県の宗教局から出版される予定であることなど貴重な情報を得ることができた。そして、デンマからの帰りに、デルゲ版大蔵経(sDe dge dpar khang, パルカンとは印刷所のこと)として有名なデルゲ(sDe dge, 現在の四川省甘孜藏族自治州徳格)を訪れた。

カム地方調査の後、11月上旬から再びラサに入った。最後のラサでの滞在ではこれまでの調査で得た資料の整理と論文の執筆を行った。寺院調査としては、チベット暦の11月28日（西暦1月17日）から4日間、ラサ市タクツェ県にあるロ寺（Lo dgon pa）においてチャム（'cham, 仮面舞踊）があり、ロ寺にその間滞在した。ロ寺は「クムチェー・スム（sKu mched gsum, 精神三兄弟）」と言われる初期カダム派の僧の一人であるチェンガーパ・ツルティムバル（sPyan snga pa tshul khrim 'bar, 1093-1103）によって1095年に建立された寺院である。文化大革命でほとんどが破壊されているものの、タクツェ県の中では比較的規模の大きい寺院で、チャムの際も地元の人を中心に100人以上の参拝者があった。ロ寺と関連して、数日後、チェンガーパの弟子であるチャユルパ（Bya yul pa gzhon nu 'od, 1075-1138）建立の寺院、マラ寺（Ma ra dgon）の調査のため、メルド・コンカルも訪れた。マラ寺は他のカダム派寺院と同じく、カダム派時代のものは何も残っておらず、非常に小さな寺院であった。

2月には中国滞を終え、ラサからカトマンズに移動し、3月15日から4月3日までの20日間、ブータンを訪問した。ブータン国立図書館（The National Library of Bhutan）はいくつかのカダム派に関する書籍を所蔵しており、それらを閲覧することとネニン派（gNas rnying pa）と呼ばれる寺院への訪問が滞在の目的であった。ブータンでの調査にあたり、ブータン国立図書館の受け入れでビザを作成して頂き、同図書館には多大なご協力を頂いた。

2. 全体を振り返って — まとめと今後の展望

2-1. 写本研究

ラサにおける貴重書、特に研究機関及び各寺院における写本の所蔵状況について、上に述べたペルツェク・チベット文古籍研究室の協力は非常に大きなものであった。同研究所は、ラサにある他の公の研究機関と異なり、研究員のほとんどが寺院関係者、僧侶、尼僧であるため仏教書籍に関する知識が高く、また古籍の保存にも非常に関心が高い。私がちょうど留学を始めた2004年には同研究所編纂で『デブン寺所蔵古籍目録』が出版され、偶然にも2006年にはその中からカダム派に関する古籍30帙、*bk' gdams gsung 'bum phyogssgrig*（四川民族出版社 2006）が出版された。カダム派史や古籍の保存など、興味関心を同じくすることで、同研究所のご好意により寺院の古籍所蔵状況の調査に参加させて頂き、その中から貴重な写本を何点か見せて頂いたりもした。ちなみに、古籍は文化財であるので、外国人が閲覧をしたりそれらを用いて研究する際、慎重にならなければいけない。というもの、チベットでは最近、現地と外国人研究者の間で写本をめぐる問題が頻繁に起こっているからである。今後、これらのさまざまな問題がクリアできれば同研究所との共同研究を考えている。今回のラサでの写本調査で、チベット本土には多くの貴重書があることがわかり、今後も引き続き、チベット本土での文献調査が必要であると強く感じた。

2-2.寺院調査

チベット本土での寺院調査については、初期カダム派寺院を中心に行ったが、2年間の滞在で主要な初期カダム派寺院の大部分を訪れることができた。しかし、実際に寺院調査を行ってみて、多くのカダム派寺院は、13世紀のモンゴル軍の侵入や文化大革命などにより、寺院の歴史が書かれた目録(カルチャク dKar chag)を紛失しており、また以前を知る年配の僧侶も少ないことから、カダム派時代の文献や文化財などがほとんど残っておらず、調査で十分な情報を得ることは非常に困難であった。しかし、調査を続けていく中で、カダム派時代以外のこと、例えば寺院の現状や経済状態などさまざまな情報を得ることができた。例えば、最後に訪れた口寺ではちょうどチャム(仮面舞踊)の期間に滞在することができ、祭りの全行程を記録することができた。現在、チベット本土では、多くの寺院で、文化大革命により中断されていたチャムなどの祭りが復興されており、これはカダム派寺院も同じである。チャムなどの祭りやタンカ開帳が初期カダム派時代に遡るかということについてはまた別の問題であるが、祭りの期間参拝者が増え、それにより経済効果も見舞われ、寺院が活気を取り戻しているということは注目すべき事実である。今まで行ってきたような現在残っている文献の中でカダム派寺院に関する記述を丁寧に拾い上げていく作業は非常に重要であるが、それと同時にこのような寺院の現状の把握もカダム派寺院に関しては重要であると感じた。

さらに、上の寺院調査の合間に、聞き取り調査により、文献上現れる古い地名の確認もいくつか行うことができた。この作業は今後、カダム派に関する地名、寺院名のデータベースを作成する際に基礎となるものである。そして、同じ興味を持つチベット人研究者、一人はラサ地域の寺院紹介である *Gang can bod ky gnas bshad lam yig gsar ma* (民族出版社 2004)の著者のチュンペル(Chos 'phel)氏、もう一人はカダム派寺院が点在するペンボ(Phan po)地方の歴史編纂に携わったいる地元出身者のソナム・チュータル(bSod nams chos dar)氏との交流と意見交換ができたことは大きな成果であった。カダム派寺院はラサ近郊をはじめ、中央チベットに多く存在するが、その数は多く、一人での調査は不可能である。また一般的なチベット人の参拝のコースからは外れており、道を良く知る地元の方の道案内は必須であるし、聞き取りの際、ラサ語とは少し異なる方言などもあり、外国人であるわたしには少々の困難がある。今回、上の両氏以外にも多くの地元出身者、僧侶などの寺院関係者との関係が多く築けた。今後、上のような人々と協力して調査を行い、一方的でない現地調査を続けていければと考えている。

最後に、この2年間の研究活動は松下国際財団の奨学金がなければ成り立たなかったものであり、財団には非常に感謝をしている。2年間ありがとうございました。



ラサでの滞在先にて



東チベットのタシ・ナムゲーリン



ロ寺



ラサのシンボル、ツクラーカン